

要旨

節を名詞化する「の」「こと」の使い分けに関わる要因

—BCCWJ (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) を用いて—

指導教員 杉浦 滋子 教授

言語教育研究科 日本語教育学専攻 秋本 瞳

本研究は、節を名詞化する「の」「こと」の使い分けを、コーパスを使用し、多様な用例を収集した上で、使い分けにどのような要因が関わっているのか考察したものである。

先行研究においては、「の」「こと」の選択について、その出現環境に関わらず特定の原理を適用させる立場と、出現環境によって「の」「こと」の選択に関わる各々の原理を想定する立場がある。本研究は、後者と立場は同じであるが、コーパスを用いて用例を収集し分析した結果、特定の原理が適用不可能な部分が存在することを明らかにした点において、後者の立場をとる先行研究とは異なる。

先行研究では、意味的、語彙的に「の」「こと」が使い分けられる場合について言及されている。本研究は、BCCWJ を用いて多様な用例を収集する中で、先行研究に見られた意味的、あるいは語彙的な要因から「の」「こと」の説明が可能と考えられる用例の他に、構文的な要因に関わる用例、文体が「の」「こと」の選択に関わる用例が存在することを示した。構文的な要因に関わる用例は、節の名詞化の用例とは考えられない用例として挙げた、関係節と分裂文に類似した特徴をもつものである。文体が「の」「こと」の選択に関わるものは、特定の要因が「の」「こと」の選択に関わるとは断言できないものの、文体の影響がその一因となっていると考えられる用例である。

本研究は 6 章で構成されている。

1 章では節を名詞化する「の」「こと」は、いずれかのみ用いられる場合と、いずれも用いられる場合があり、多くの先行研究でその使い分けについて論じられてきたことに触れ、本研究の目的、考察対象に言及した。本研究では、先行研究を踏まえ、関係節として考えられる場合を考察の対象外とした上で、考察の対象範囲を明確にした。

2 章では、先行研究について、各々の主張や考察対象の範囲、「の」「こと」の出現環境に対する立場から分類し、先行研究によって明らかとなっている点を取り上げた。先行研究には、意味的な観点から「の」「こと」の使い分けについて説明を試みる立場や、コーパスにおける用例に基づいた研究などがある。この中で、特に意味的な観点から「の」「こと」の使い分けを論じる立場は、久野(1973)をはじめとして多くの先行研究でとられてきた。しかし、先行研究の考察対象の範囲に関しては、先行研究の間で考察対象の範囲が一致しておらず、

明確に示されていない部分があることから、考察対象の範囲を明確化する必要性を示した。さらに、先行研究において、上位節述語が知覚動詞の用例など意味的に「の」が選択される場合や、複合助詞の用例で語彙的に「こと」が用いられる場合など、「の」「こと」の選択に関わる要因の一部が明らかとなっていることを指摘した。

3章では、コーパスを用いた用例収集の方法について述べた。作例の場合、限定された用例を扱っている可能性がある。そこで、本研究では、コーパスを使用し、多様な用例を収集することで、その限定性の解決を試みた。コーパスの1つであるBCCWJ(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)の用例の一部を検索できる「中納言」のコアデータを使用し、用例を収集した。収集した用例から、「の」「こと」に助詞が後続する例を抽出し、その後一つ一つ上位節述語やその品詞についての情報を付与した。そして、明らかに節を名詞化する「の」「こと」の用例とは考えられない用例、即ち1章で挙げた関係節の用例、分裂文の用例を除き、最終的に節の名詞化に該当する用例のみを選別することで、本研究で分析の対象として適切な用例を得た。

4章では、3章で収集した、節を名詞化する用例について、更に、「の」「こと」のいずれかが用いられるのか、先行研究などにより確定している用例に該当するものを扱った。「ことがある」などの固定化している場合、上位節の述語が知覚動詞の場合、上位節の述語が「待つ」等特定の用例の場合、複合助詞の場合などがこれに該当する。語彙的に固定化した「ことがある」などの表現は多く見られたが、意味的な要因が「の」「こと」の選択に関わっていると考えられる、上位節述語が知覚動詞の場合や「待つ」等特定の動詞の場合は、用例数が少ないことが明らかになった。

5章では、4章では扱われなかった用例について扱った。ここで扱われた用例は、「の」「こと」の選択に関わる要因が明らかでない用例となる。まず、これらの用例を「の」「こと」の用例に分け、後続する助詞と上位節の述語の品詞ごとに分布をみた。その結果、「の」「こと」に後続する助詞、上位節の述語で多く用いられるものが異なり、「こと」については用例数も「の」より多いが、様々な助詞が後続していることがわかった。「の」は、助詞では「は」「が」「も」が多く、上位節述語の品詞では「名詞」「動詞」「ナ形容詞」が多い。「こと」は、助詞では「が」「を」「に」、上位節述語の品詞は「動詞」が特に多くみられた。

さらに、「の」「こと」に後続する助詞、上位節の述語をクロス集計し、それらの結果について χ^2 検定を行った。検定結果は有意であり、それらについて「の」「こと」に後続する助詞、上位節の述語が独立ではないことを示した。次に、「の」「こと」の使い分けの差異をt検定を用いて検証した。その結果、有意であるパターンの用例についてみると、「の」「こと」の置き換えが可能な例と、「の」「こと」の置き換えが不可能な例があり、特に後者については、様々な要因が考えられる。分裂文的な用例や、語彙的な用例と考えられる用例も見られた。

「の」「こと」の選択に関わる要因として、本研究では、文章の性質に関わる可能性についても言及した。「です・ます」といった文章のスタイルと、白書、雑誌といったサブコーパスの割合を示した。全体の結果と比較すると、助詞別には、文体の影響が少ない部分があるこ

とも否定できないが、白書においては「こと」が多く用いられる傾向が強く、文体が「の」「こと」の選択に関わる要因として考えられる可能性を示した。品詞別には、「だ」「です」といった文章のスタイルや、知恵袋、白書における、「の」「こと」の割合の差異が全体的に見られた。受け身表現に関しても、ある程度好んで用いられる文章のスタイルが存在することが示唆された。

6章では、以上で得られた結論として、特定の要因で「の」「こと」の使い分けの説明は不可能であり、原理を適用できない範囲も存在することを述べた。